

## 「特別支援教育研修会」

10月27日（火）に、日立特別支援学校特別支援教育コーディネーターの木村重文先生、須藤貴志先生を講師に迎え、「特別支援教育研修会」を行いました。前半は、木村先生より「特別支援教育コーディネーターの役割」、「相談窓口としてのコーディネーターの知識①特別支援学級と通級指導教室（通級による指導）②WISC検査」について、後半は須藤先生より「保護者や関係機関との連携」についてご講話いただきました。めまぐるしく変化する特別支援教育の現状や課題、担当者として必要な知識や支援方法等を、分かりやすく具体的に教えていただき、大変有意義な時間となりました。本研修で学んだことを各学校で伝達し、今後の支援に役立てていただきたいと思います。

### 参加者の感想

- ・初めてコーディネーターになり緊張の日々でしたが、お話を聞いて安心しました。この役割が学校全体の中で機能されることが重要であると再確認できました。
- ・通級による指導やWISCの数値の見方について、詳しく知ることができ、保護者への啓発や指導に役立てたいと思いました。
- ・去年は、保護者の障害受容プロセスⅡ「否認」を実体験した1年でした。自分たちの知識を高め、保護者に寄り添う支援ができるようになりたいと思いました。
- ・「人は納得して動く」。心に強く留めたいと思いました。

## 「第3回 教育課題調査研究会議」

12月8日（火）に、第3回の「教育課題調査研究会議」を開催しました。市内各小学校、特別支援学校から、26名の教育課題調査研究員の先生方が参加されました。プログラミング教育について、研究員の先生方が考えた授業の活動案、今年度各校で行われた授業実践記録を持参していただき、小グループで検討し合いました。

研究員の先生方には、コロナ禍の中、プログラミング教育について熱心に取り組んでいただきました。会議での研究結果を基に、現在報告書の作成を進めています。



## 不登校対策支援事業

# 「神峰山ハイキング」

11月10日（火）、雲ひとつない青空が広がる秋晴れの中、15名の児童・生徒が「神峰山ハイキング」に参加しました。事前に下見をしたり階段の昇り降りて体力をつけたりして臨んだ生徒もおり、当日を楽しみにしていた様子がうかがえました。ところどころ険しい道もありましたが、「がんばれ」「もう少し!」と互いに声をかけ合いながら、山頂を目指すことができました。

山頂では、大きな声を出して山びこを試したり、相談員や友達と語り合ったりしながら、疲れも一瞬で吹き飛ばすほどの素晴らしい景色を眺めました。その後も、きららの里まで、誰一人くじけることなく下山することができました。みんなで食べたお弁当の味は、格別だったことでしょう。昼食後は、「おにごっこ」や「だるまさんがころんだ」をしたり、遊具で遊んだり、ダンスを踊ったりと、それぞれに楽しく過ごし、元気いっぱい交流することができました。終わりの会では、研究所長から一人ずつ認定証が手渡されました。1日を通して活動を行うことができた達成感が表情にあらわれていました。

今後も、様々な活動を通して、少しずつ自信をつけて生活していくことを願っています。

子どもたちに励ましや賞賛の声をかけてくださった先生方、ありがとうございました。



## 「12月の研修会の様子」

### ①令和2年12月12日（土）「発達障害の理解と支援研修会」

吉井 勤人 先生（山梨大学大学院 准教授）

**「情緒をコントロールする力（情動調整）と自尊心を高めるための支援」**

○オンラインで行いました。市内の保育園・幼稚園等の教職員（介助員、生活指導員等含む）、児童クラブ支援員、保護者、市民の方等、60名の方が参加されました。

参加者から、

「息子が、自分で情動調整しながら生きている、成長しているということが分かり、とても嬉しく感じました。」

「園児の行動の動機、理由が少し分かったような気がして安心しました。」「情動調整や自己肯定感を高めるということは、支援の必要な子だけでなく、全ての子どもたちの幸せのために重要だなと感じることができました。」などの感想が寄せられました。



## ②令和2年12月19日(土)「不登校に関する研修会」

川上 康則 先生(東京都立矢口特別支援学校主幹教諭)

「集団参加や学校生活への不安の理解とつまずきへのアプローチ」

○オンラインで行いました。不登校又は登校しぶりの状況にある児童生徒の保護及び不登校問題に関心のある市民の方、学校教職員、教育相談員、市関係職員等38名の方が参加されました。

参加者から、「子どもの心の受けとめ方のポイント、いじめに関すること、ゲーム依存、自尊感情など、とても幅広い話を聴くことができました。」「子どものつまずきは、周りの環境や大人の関わりが強く関係することを知り、自分自身も変わらなければ、また向き合ってみようと思いました。」「不登校対応が増える中、保護者のあせりから学校も対応を急いでしまうことがあります。強引な関わりにならないよう、児童・生徒の内面をできるだけとらえながら、適切な対応をしていきたいと改めて思いました。」などの感想が寄せられました。



## ③令和2年12月25日(金)「QU活用研修会」

武子 みち子 先生(早稲田大学 河村茂雄研究室所属)

学級経営アセスメントQU 専門家派遣講師)

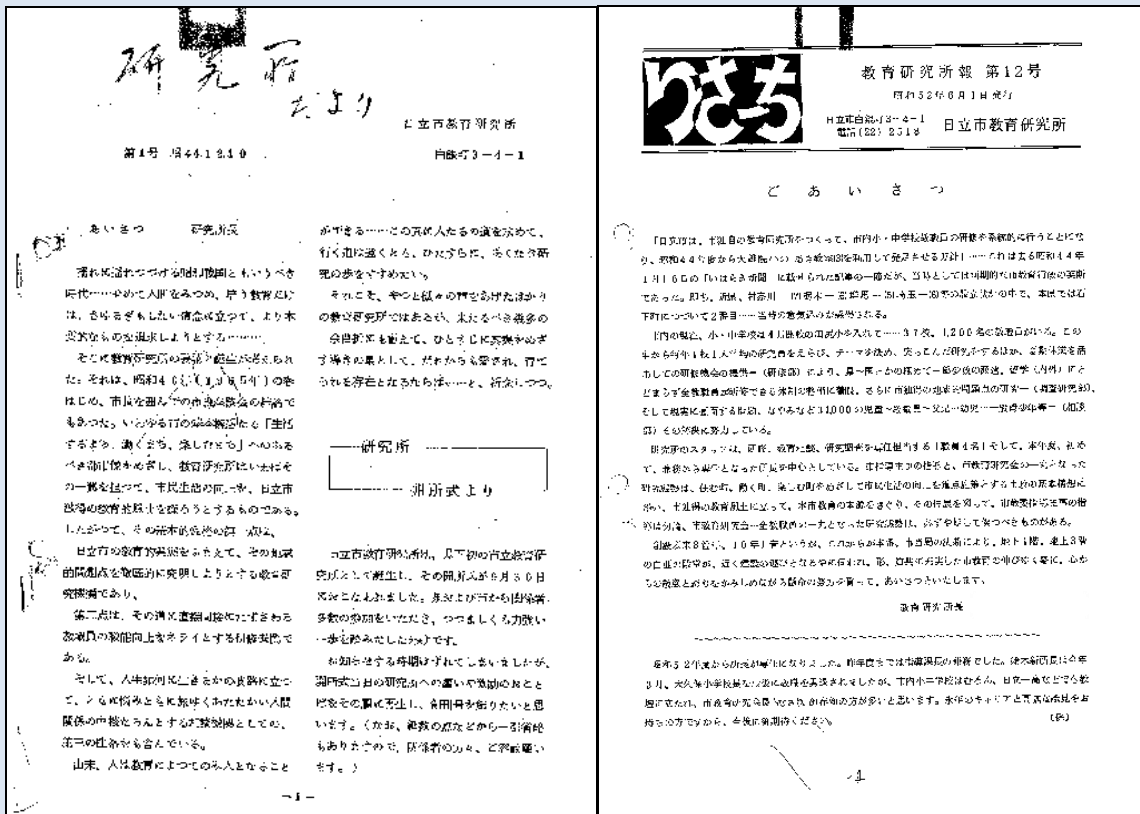
「ハイパーQU結果データの見方 ソーシャルスキル講習(ルールリレーション)」

○ハイパーQUについて、その結果の見方や活用方法に関する研修会でした。今回は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、12月開催となりました。そのため、持参していただいたQUの結果2回分を比較して考察することができ、武子先生から、日頃の学級経営が結果にどのように結びついているか、今後どうしたら来年度にいかせるかなどの具体的なご指導をいただくことができました。冬休み初日の開催でしたが、研修会終了後は個別にアドバイスを受けたいと長蛇の列ができるほど、武子先生と参加者の先生方の熱い想いが交差した研修会となりました。



# 「りさーち」300号!

教育研究所報「りさーち」も、今号で300号の発行を迎えることができました。過去のデータを紐解いていきますと、第1号は「研究所だより」(昭和44年12月10日発行)でした。「りさーち」になったのは第12号(昭和52年6月1日発行)から。歴史の重みを感じます。これからも様々な情報を発信していきたいと思えます。今後とも、ご協力よろしくお願ひいたします。



<第1号 研究所だより>

<第12号から「りさーち」に>

## 編集後記

2021年がスタートしました。年末年始、ご自宅で久しぶりにゆっくり過ごすことができた、という先生方も多かったのではないのでしょうか。

あるスポーツ選手が、「コロナだからこそ、できなかったことを数えるのではなく、できたことを数えるようにしている。」という話をしていました。4年に一度のオリンピックのために、何年も練習を積み重ね、努力を続けてきた選手の言葉だけに、心に響きました。

今日から3学期のスタートです。今だからこそその温かで前向きな言葉が子どもたちに届きますように。先の見えない不安な毎日が続きますが、3学期もどうぞよろしくお願ひいたします。(山本)